

氏名（本籍） 佐藤 正美（東京都）
学位の種類 博士（看護科学）
学位記番号 博乙第 2696 号
学位授与年月 平成 26 年 6 月 30 日
学位授与の要件 学位規則第 4 条第 2 項該当
審査研究科 人間総合科学研究科
学位論文題目 直腸がん前方切除術後の排便障害を軽減する看護支援に関する研究

主	査	筑波大学教授	博士（医学）	江守 陽子
副	査	筑波大学教授	博士（心身障害学）	森 千鶴
副	査	筑波大学准教授	博士（保健学）	浅野 美礼
副	査	筑波大学講師	博士（医学）	榎本 剛史

論文の内容の要旨

佐藤正美氏による論文は、下記の【研究 1】【研究 2】から構成される。

【研究 1】排便障害を評価する排便障害評価尺度 ver. 2 の作成

（研究目的）

直腸がん前方切除術は術後、前方切除シンドロームといわれる排便障害を生じ、便意逼迫、排便回数の増加、残便感、便による下着汚染などの症状が認められる。こうした前方切除術後患者への看護介入を検討するために、評価ツールとして排便障害評価尺度の作成を試みる。

（対象および方法）

文献ならびに大腸肛門病領域の医療専門職者などの意見を参考に、これまで使用されていた聞き取り式の排便障害評価尺度に 5 項目を追加して、14 項目からなる自記式の質問紙を作成した。

関東圏内の 2 施設で 2005～2008 年に直腸がんで低位前方切除術を受けた男性 29 例、女性 13 例、平均年齢は 60.8 歳（38～78 歳）の術後 1 か月の患者を対象に郵送法により調査した。

(結果)

探索的因子分析（最尤法，プロマックス回転）の結果、評価尺度は 2 因子構造であることを確認した。説明された分散の合計は 52.6%であった。第 1 因子の信頼性係数クロンバック α は 0.82、第 2 因子は 0.78 であり、全体（12～60 点）では 0.85 であった。

(考察)

因子 1「便の保持と排泄」は、貯留した便を保持する機能と排泄する機能を評価する項目が該当した。また、手術による生理学的・解剖学的変化から生じる側面を評価していると思われる。因子 2「つきまとう便意」は、便の貯留はないが便意が変化することで生じる残便感や、便意を感じる時間帯の予測に該当した。手術による機能の変化だけではなく、残便感による症状も含む項目と思われた。よって、本研究において開発された自記式排便障害評価尺度は、低位前方切除術後の患者の排便障害の程度と種類を評価するためには適切な尺度であると考えられた。

【研究 2】看護介入プログラムの効果検証

(研究目的)

前方切除術後患者に対する看護介入プログラムの効果を、排便障害の程度と生活の質（QOL）の視点から検証を試みる。

(対象および方法)

2005～2008 年に直腸がんで低位前方切除術を受けた患者のうち、独自に考案した看護介入プログラムを受ける介入群 23 例と、従来どおりの医師による医学的管理を中心としたコントロール群 23 例にランダムに振り分けた。対象者は男性 32 例（70%）、女性 14 例（30%）、平均年齢は 61.1 ± 9.6 歳であった。看護介入プログラムは期待する成果を、①排便を我慢できる、②便性が整う、③スムーズに排便しコントロール感を持てる、④排便のとらわれから逃れる、として設定した。また、介入時期は退院後初回外来時とその 3 か月後の 2 回とした。介入効果の評価には、排便障害評価尺度 ver. 2 と SF-36v2 を用い、術後 1 か月（ベースライン）、3 か月、6 か月、1 年の 4 時点において郵送法により調査した。データは介入群とコントロール群の群間比較を行い、効果量（Cohen' s d）も算出した。排便障害の程度は、各群における経時変化を分析した。

(結果)

排便障害の程度は時間経過に伴い両群とも減少した。3 時点とも評価尺度の平均値は介入群の方が低値を示したが、有意差は認められなかった。効果量（Cohen' s d）は合計点とサブスケールで 0.47～0.64 と中程度の差が認められた。また、術後 1 年の排便行数は介入群が 3.0（中央値）でコントロール群は 4.25 と前者が有意に少なかった。排便のとらわれは、術後 3 か月と 6 か月では介入群が有意に低値を示した。SF-36v2 による社会生活機能は術後 3 か月時点では介入群が有意に高かった。

(考察)

排便障害の程度は通常でも術後 1～3 か月で改善され、それ以降も緩やかに改善される傾向にあるが、看護介入プログラムによって改善は促進された可能性が示唆された。また、本プログラムにより排便へのとらわれ感が軽減され、排便行数が減少する効果が認められた。しかし、本プログラムによって対象者の QOL に効果があったか否かについては十分な結論を得るに至らなかった。

審査の結果の要旨

(批評)

本研究は、直腸がんの標準術式である前方切除術後の排便障害を評価するための自記式チェックリストを作成したことと、それを用いてオリジナルの看護介入プログラムをランダム化比較試験の手法を用いて評価したものである。本研究はこれまでほとんど看護介入がされていない分野に対する、患者中心の視点に立った斬新な介入研究であり、今後も著者により研究が継続されることにより、より大きな成果が期待できると思われる。

平成 26 年 3 月 28 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。なお、学力の確認は人間総合科学研究科学学位論文審査等実施細則第 11 条を適用し、免除とした。

よって、著者は博士（看護科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。